

トマス・ウルフの第一長編小説 に於ける「死」について

宮 内 華代子

序

4冊の自伝的長編小説の作者として知られているトマス・ウルフ Thomas Wolfe (1900-1938) は、最初の長編『天使よ故郷を見よ』 *Look Homeward, Angel* (1929) によって一躍文壇に名声を確立した。アパラチア山脈の麓にあるアルタモント Altamont の町を舞台にしたその小説の中で、ウルフは主人公ユウジーン・ガント Eugene Gant の、誕生から20歳で故郷を去る日までの魂の成長を克明にたどり、作中人物の笑い声や怒声や息使いまでが聞こえてきそうなほどいきいきとした筆致で、20世紀初頭のアメリカにおける田舎町の生活を謳いあげている。

読者はその本を読み始めるとすぐに、「死」という言葉が頻繁に現われてくることに気付くはずである。愛憎美醜を孕んだ人間の生の営みをそのまま、おおらかに讃歌した一大叙事詩とも呼ぶべきこの作品に、死もまた浸透している。

『天使よ故郷を見よ』の冒頭からの35頁の間には、死に言及した記述が23か所もあり、さらに売春婦リリー Lily の死の前駆としては、死について14回も言及されている、云々……というふうに、ラッセル・リーヴァ J. Russell Reaver とロバート・ストロザイヤー Robert I Strozier は具体例を示しながら、死に関する記述と、作中人物の実際の死とが、ある一定のパターンに従って現れることをつきとめた¹⁾。また、ウィリアム・フロホック William M. Frohock は「今世紀の作家の中で、トマス・ウルフは死について最も流暢に (eloquently) 語った作家である」と断定して、「何にもまして死について考えるときに、ウルフ

の言葉は堰がはずされ、あの猛烈な奔流となってほとばしり出るのである。²⁾
と述べている。

この小論では、ウルフの第一長編小説を紐解きながら、作品の主要なテーマであり、人間の永久普遍的問題でもある「死」について、主人公の考察がどのように深まっていったかを考え、あわせて、フロホック氏の「流暢に」をここに引きだし、どのように流暢であるのか、その言葉の中味を検討していきたい。

I

ユウジーンは父オリヴァー Oliver が50才、母エライザ Eliza が42才のとき、男5人、女2人の7人兄弟の末っ子として1900年10月に生まれた。彼が4才のとき双児の兄のうちの一人である、グローヴァー Grover が急死する。

1904年にセント・ルイスで万国大博覧会が開かれたとき、エライザは夫と長女をアルタモントに残し、6人の子供達をひきつれて出かけ、そこで旅館を開業した。秋になり、博覧会が終わりに近づいた頃、グローヴァーは会場で食べた桃にあたってチフスにかかり、「あっけなく」死んだ。

真夜中、寝込んでいたユウジーンは姉のヘレン Helen に揺り起こされて抱きかかえられる。

“Do you want to see Grover?” she whispered. “He’s on the cooling board.”

He wondered what a cooling board was... Quietly she opened it (the door); the light blazed brightly on the bed. Eugene looked, horror swarmed like poison through his blood. Behind the little wasted shell that lay there he remembered suddenly the warm brown face, the soft eyes, that once had peered down at him... he remembered that forgotten face he had not seen in weeks, that strange bright loneliness that would not return. O lost, and by the wind grieved, ghost, come back again.³⁾

ユウジーンが兄の死体を一瞥したとたんに「血管を伝わる毒のように体内に恐怖が充滿した。」ユウジーンは *cooling board* という単語をまだ知らない。だがその4才の幼児の戦慄が、人間の死というものの本質的核心に根ざしていることを、「もう帰ってこないのだ (*that would not return*)」の語句から読みとることができる。兄の死体を前にして、「温かいかった色の顔」を、「やさしい瞳」をユウジーンがどのように鮮明に思い出そうと、兄の顔に温かみをもどることはなく、彼の瞳がユウジーンをのぞきこむことはもう二度とない。

そして死んだ子(人)は、よほどの悪童(人)でないかぎり、「よい子(人)だった」ということになる。亡き子の思い出がおしよせ、死によって初めてその子の全人格をしっかりと捕えることができるからである。死んでからでなければ、人の本当の値うちがわからないとすれば、なんと無駄で愚かしいことだろう。生きている間にそうしてやるべきだったのである。グローヴァーは「おとなしくて (*quiet*)」「みんなのなかじゃ一番いい子だった (*the best of the lot*)」と父母がしみじみと逝った子を偲ぶ。

生きていた肉体が死体となった瞬間から、それまでそこにあった、かけがえない人格的精神が消える。目の前の死体は、つまるところ、「ぬけがら (*wasted shell*)」にすぎない。彼の魂が二度と再び肉体に宿ることはなく、もはや生前と同じやり方で地上の者と生きることはない。愛する者を失った人は、この苦しみに耐えてなお生きていかななくてはならない。

「ああ、あとかたもない。歎き悲しむ風に乗って、霊よ、帰ってこい、もう一度。 (*O lost, and by the wind grieved, ghost, come back again.*)」

巻頭詩の最後の一行に詠み込まれていたこの句が、以後もたびたび出てきて、リフレインの役目を果すのだ。

グローヴァーの死から受けた衝撃的な恐怖は、その後、成年期に達するまで、ユウジーンの死の思索の基調となって、作品の最後まで流れ続ける。著名な心理学者のウィリアム・スナイダー *William U. Snyder* はこれに関して、こう説明している。

ウルフ (ユウジーン) の死に対する恐怖は、グローヴァーの死を契機として芽ばえたのかもしれないが、4才のときの体験自体から決定的な影響を受けたとは必ずしも考えられない。むしろ、ユウジーンは、そのときの両親の悲嘆や狼狽ぶり、その後も長く続いた癒し難い心痛をみて、「死は悲惨なでき事である」ということを悟っていったのである。⁴⁾

トマス・ウルフ文学の一研究者としての筆者は、多くの臨床例よりも、ウルフの作品を拠り所として、このスナイダー博士とは異なる推察をするのである。ユウジーンは驚異的な記憶力と並はずれて強い感受性に恵まれていた。⁵⁾「生後18カ月のころ、籠の中で暖かい日光を意識していらい、忘れたことがないのです。ぼくは忘れるということを知らない⁶⁾」というほどに、記憶力がよいのは、またどんなにか辛いことでもあろう。ユウジーンの絶大な記憶力は母親ゆずりである。エライザにとって、「グローヴァーの死が生涯で最も凄じい傷を与えた⁷⁾」のと同様に、「血管を伝わる毒のような恐怖」の幼時体験は、彼の脳裏に生涯張りついていたにちがいない。

II

当然の成りゆきではあるが、ユウジーンが長ずるにつれて、4才のときには窺い知ることができなかった死の全貌が浮かび上がってくる。

すでに9才の頃のユウジーンの胸には、「死と忘却のものすごい恐怖、大地という巨大な墓場の中で、命も思い出も欲望も解体していくことの恐ろしさが荒れ狂っていた。」そして、石工の父のように、死後も残る職業を選ばなかったばかりに「何一つ残さず消え去った人々を心から悼むのであった。⁸⁾」

ジョン・レナード John Leonard の私塾に通い出してから2年目の15才になりかけた頃の一節では、「我々の命はことごとく煙となって空に昇る。影も形も、おぼろな夢のあとに残さず……今日の倦怠のみが明日の苦勞の報酬だ。いかにして我が身を救えばよいのか」と生のはかなさを嘆いている。

同じ頃のある日、町の葬儀社の前を通りかかったとき、自分の埋葬された姿

を想像して、「心臓が縮み上がるのを感じた。しばらくの間閉じ込められていた古い恐怖の幽霊が、のさばり出てきて、ユウジーンを悩ませた」のである。「いずれは自分の葬式をしてもらう場所の前を毎日通っているわけだ…」と、自己の死についての妄想が広がり続ける。

...or shall I, too, ride dead to some mean building yet unknown?
 Shall this bright clay, the hillbound, die in lodgings yet unbuilt?
 Shall these eyes, drenched with visions yet unseen, stored with
 the viscous and interminable seas at dawn, with the sad comfort
 of unfulfilled Arcadias, seal up their cold dead dreams upon a
 tick, as this, in time, in some hot village of the plains?⁹⁾

これらの抜粋から、ユウジーンが死の「不可避」と「普遍性」、つまり、自分もまたいつか必ず死ぬべき存在であり、何人たりとも死を避け得ないことを、すでに了解していることがわかる。さらにまた、ユウジーンがこのようにひどく死を恐れているのは、人間が没後、「あとかたもなくなって」「命も思い出も欲望も解体していく」と考えているためであることが明らかにされる。

死についてだけは、我々は己れの経験から何も知ることができない。かといって、いくら大勢の人の死を見聞したとしても、肉体の死によって魂もまた無と化するのか、あるいは生き続けるかなんの確証も得られない。死後の存続を、あるいは虚無を、立証するものも、否定するものも何もない。我々にできるのは、死後の生か無のいずれかを「信じる」か、あるいはエビキュリアンのように、この問題を全く無視するしかないのである。したがって、『天使よ故郷を見よ』に強く表わされている死後の一切の消滅はユウジーンの「信念」であったわけだ。ユウジーンは、その確固たる自己の信念からくる死の恐怖に激しく苛まれる。だが、その恐怖を和らげようとするものに親しみ熟知していながらも、死を克服する手段としてはそれらを無視に近いかたちで拒否するのである。

子供時代のユウジーンは、3才の頃から毎日曜日、欠かさず長老派教会の日曜学校に出かけ、宗教の美と神秘にふれ、深い感銘を受けたと記録されてい

る。¹⁰⁾そして作品のおわりに至るまで、毎夜祈禱をささげるユウジーン¹¹⁾の姿がみられるのであるが、それは「敬虔な信仰心からではなく、単なる「習慣」からであったと白状する。そしてきっぱりと、「生の無を信じ、死の無を信じ、死後の無を信じることができる」、「もともと、神も天国も、地獄も信じていない」不信者である、と自己を規定する。¹²⁾

驚くべき読書欲にとりつかれたユウジーン少年は、小学校4年までには町の図書館の本を全部読みつくし、レナード塾に通っていた4年間には、ラテン、ドイツ、イギリス文学を学び、英語で書かれた一切の大抒情詩を熟読していた。さらに州立大学在学中は、ヘーゲル・ガントと仇名をつけられるほど哲学にうちこみ、教授と渡り合うまでに、哲学論争を得意とした。にもかかわらず、古典文学も、英詩も、唯心論哲学も、キリスト教の教えと同じように、彼の「死後の虚無」の信仰をゆるがすことはできなかったのである。

モンテーニュ Michel Eyquem de Montaigne (1533-1592) は、「或る人たちが『恐ろしいものの中で最も恐ろしいもの』と呼んでいるこの死を、他の人たちが『この世の労苦を免かれる唯一の港』とか、『自然の至上善』とか、『我々の自由の唯一のささえ』とか、『あらゆる不幸に対し誰にもたちまちにきく薬方』と呼んでいるのを、知らない者はないじゃないか。¹³⁾」と驚歎している。死に対する考え方は、人によって実にさまざまであるが、『天使よ故郷を見よ』のユウジーンと、死が「解放」であるとか「救い」であるといった考え方とは無縁であった。

じっさい、ある人々は、死後の生を断固信じている。古代人や未開人の間では、魂の永遠の存続に対する強い信仰はむしろ一般的であって、死者は死後も現世と同じ生活をおくると思われていた。多くの高次の宗教が、死後の生を説き、現代にいたるまで信者はその教説を信じてきた。一方で、歴史的にみて、近代ほど多くの人が「死んだらすべて終わり」と考えている時代はないのではなからうか。文明・文化の進歩、科学・生物学の発展、理性の絶対的優勢とともに、人間は、死との戦いに、かつては必ず携えていった武器を、次々と捨てていった。『天使よ故郷を見よ』の主人公がとりつかれていた死の恐怖とは、

死に対して、素手で立ち向かわざるを得なくなった近代人に特有の、すさまじい恐怖であると言える。

Ⅲ

「父と母」、「放浪と郷愁」、「北部と南部」…のように、ウルフの作品のテーマには、「対比」がつきものであるが、「死」についてもやはり、この手法が用いられている。自己の特異な創作方法を告白したエッセイ、『ある小説の物語』*The Story of a Novel* (1936) の中で、ウルフは「現実の現在 (actual present time)」、「過去 (past time)」、「永遠の時間 (time immutable)」の「3つの時間の単位 (time element)」を考え出した。ウルフの定義によると、「永遠の時間」とは、「河、山、海、大地」の時間であり、「人の命のはかなさが投影される、一種の永久不変の宇宙の時間」¹⁴⁾である。ウルフの長編第一作にも、未来に向かって「現実の現在」を生きていくしかない人間と、「永遠の時間」を有する自然あるいは宇宙との対比を、いたるところに見出すことができる。

我々は、一つの「原子 (atom)」である。永遠の海に比しては、人は「浪 (wave)」¹⁵⁾、「彼の生は淋しい海にくだける浪のようだ」。大地に比しては「土くれ (clay)」¹⁶⁾、あるいは「ちり (dust)」¹⁷⁾。宇宙にあっては「煙 (fume)」¹⁸⁾、「我々の命はことごとく煙となって消えるだけ」である。アルタモントの町をとりかこむ山々は、「成長を越え、闘いと死を越えた現実の盃。永遠につづく変化のただ中にある絶対的な統一」であった。それにくらべて、町は「高原に張った野営テントのようなものだ。時間に抵抗できるものは何一つない。いつか広野に取り返され、食いつくされ、埋葬されるべき、材木としっくいのちゃちな積木組工」である、という具合に、対比の例を挙げれば際限がない。

さらにつけ加えれば、たとえアメリカ国民が死に絶えたとしても、大地だけは永遠に残るであろう、とユウジーンは思う。

He felt suddenly the devastating impermanence of the nation.

Only the earth endured—the gigantic American earth, bearing upon its awful breast a world of flimsy rickets. Only the earth¹⁹ endured—this broad terrific earth that had no ghosts to haunt it.

このように、随所にちりばめられた永却の自然と人間のつかのまの命との対比、そこから生まれてくる比喩を用いた詩的表現は、作品の叙情性を一段と豊かにしている。また、本論のⅠ、Ⅱでみてきた主人公の死の概念や死の恐怖を表わした叙述的な表現とはちがって、人間存在を極小化したこれらの文章は、一種の諦観からくる哀しい、静かな雰囲気さえ漂わせる。「素裸で僕は母の胎内から出てきた。裸でもとへ帰るだろう。母なる大地の胎内に飲み込んでもらおう。丸裸で、人間の雄々いしはしくれとして、巨大な茶色の手足で抱いてもらおう。」²⁰というふうに。

N

『天使よ故郷を見よ』の35章は全章がユウジーンの兄ベン Ben の臨終場面である。ほぼ24時間にわたって一刻きざみで進行する、詳細な凄絶極まる迫真の描写を生み出した。『天使よ故郷を見よ』は40章から構成されている。作品を読み出してまもなく、5章の中で12才のグローヴァーが急逝した。グローヴァーとベンは双児であった。双児の兄弟の死が、35万語に及ぶ膨大なこの小説の中で、ほぼシメトリカルな位置に置かれているのは、偶然とは思えない。

ユウジーンの18歳の誕生日が過ぎてまもなくのことであった。ベンは流感をこじらせて肺炎にかかり、一日以上も断末魔の苦しみが続いた。生を奪わんとする死と、それに必死に抵抗する生との凄惨な闘いが終わって、ベンが息を引きとった。

They were tired, but they all felt an enormous relief. For over a day, each had known that death was inevitable, and after the horror of the incessant strangling gasp, this peace, this end of

pain touched them all with a profound, a weary joy... Eugene thought of death now, with love, with joy. Death was like a lovely and tender woman, Ben's friend and lover, who had come to free him, to heal him, to save him from the torture of life.²¹⁾

ここでは、死への恐れが全く消え去り、ユウジーンは、初めて「愛と喜びをもって死を思う」のである。死はベンの「友人」であり「恋人」であり、「愛らしく」「やさしい」と書かれている。

しかし上の引用箇所から、ユウジーンの死観について急変をきたした、とするのは早計であろう。たしかに、字義通りの解釈からは、ベンの死によって、ユウジーンが死の恐怖から解放され、死と和解したかのようにみえる。²²⁾ ベンの死の場面を迎えるまでも、多数の人の死と、主人公の死の思想について書かれてきた。兄のグローヴァーにはじまって、うら若い売春婦リリー、大学時代のユウジーン・ルーム・メート、それに父の長年来の友人や知人が、次々に死んだ。だが、これまで一度もユウジーンは彼等の終焉に立ちあつてはいなかったことを、ここで思い起こしてほしい。ユウジーンが人の臨終を目撃するのは、今度が初めての体験であった。

愛する者の死にぎわの激烈な苦痛を共に苦しんだ者は、すべてが終わったときに、不思議と、やすらぎを感じることがある。上の引用にあるように、「みんな疲れていたが、どっと重荷がおりたような気分」になるのである。ヘレンが言うように、「ありがたい、あの苦しみが終わってよかった」のだ。死が訪れ、ベンの苦痛が去れば、彼の苦痛をわかちあっていた者の苦しみもなくなる。ユウジーンが死に対して愛と喜びを抱いたのは、親しい者に死が侵入したとき、そのすぐあとで、残された人がしばしば経験する、一瞬間の神秘的なこの気持からである。その愛と喜びはけっして長く続きはしない。時の経過とともに、死の残忍な本性が見えてくる。

死者にはもはや、恐怖も苦痛も苦悩もない。ユウジーンが、もうベンの苦しみを煩う必要がなくなったとき、生き残った者としての彼自身の苦悶が始まる。

すなわち、この時点から、14年前にユウジーンが真夜中に揺り起こされ、グローヴァの死体といきなり対面したときの、あの「血管を伝わる毒のような恐怖」の死の世界にひきつがれるのである。ユウジーンは、断じて死の恐怖から解放されたわけでも、死を克服したのでもない結論するゆえんである。

だからベンの場合にもグローヴァの時と同じように、お決まりに従って、あの子は「おとなしい子だった」とエライザが逝った子をしみじみと偲ぶ。ヘレンも「死ぬ2、3日前まで、ちっともわかってなかった。ベンはみんなの中じゃ、一番いい人だったんだ」とほめちぎる。グローヴァも「おとなしくて」「みんなの中じゃ一番いい子」だった。人の値うちは、元気で生きている間に認めてやるべきだったのである。

No, this is not Ben (Eugene thought). No trace of him is left in this deserted shell. It bears no mark of him. Where has he gone? Is this his bright particular flesh, made in his image, given life by his unique gesture, by his one soul? No, he is gone from that bright flesh. This thing is one with all carrion; it will be mixed with the earth again. Ben? Where? O lost.²³⁾

ユウジーンは兄弟中でベンと一番仲がよく、ベンは彼の最もよき理解者だった。それだけに、遺骸を目前にしての、兄の喪失感から受けるユウジーンの手はなおいっそう深い。兄への愛は、いまや対象を失って空をさまよう。「歎き悲しむ風に乗って、霊よ、もどってこい、もう一度ノ」と、あの魂の悲痛な叫びがあがる。

V

65才で癌を発病したガント爺さんの口ぐせは、「お次は、どうやらこのおいぼれじゃ」であった。妻のエライザも、娘のヘレンも、「ひょっとしたら、父さんより先に死ぬかもしれない」と恐れている。死の影はダモクレエスの剣の

ように、ガント家の上におおいかぶさって彼らを悩ませた。

1926年に『天使よ故郷を見よ』の原稿に着手するまでに、ウルフは二人の兄と父を亡くし、ハーヴァード大学大学院在学中は、咯血したことから結核を疑って、自らの命を危ぶんだ。ガント一家にとりついていた「死の切迫」という強迫観念は、とりもなおさず、作者自身のものでもあったのである。

ウルフと同時代の小説家、アーネスト・ヘミングウェイ Ernest Hemingway (1899-1961) は、『牛後の死』*Death in the Afternoon* (1932) の中で、「最も単純で最も根本的なことは惨死 (violent death) である…惨死こそ書くに価する主題の一つだ²⁴⁾」と記し、好んで戦死や闘牛士の死をとりあげた。

それとは対照的に、ウルフの『天使よ故郷を見よ』に於ける死は、例外なく、いわゆる「日常の死」である。それもほとんどすべてが、病気による急死、長くとも数日間の闘病後の「あっけない」死である。「それまで一日として床に就いたことがなかった」偉丈夫や、「先週まで何ともなかった」若者が、死の不意打ちにあり。ヘミングウェイの作品にしばしばみられるような、英雄的な死を遂げる者はいない。死に臨んで、人間の威厳とか勇氣とかを示すこともできないまま、ぼっくりと、ひっそりと、あるいは、「もがき苦しむ巨大な昆虫のように」むごたらしい死に方をする。

オリヴァ・ガントが、ただひたすら死を恐れ、うろたえ、泣きわめくのとちがって、末息子のユウジーンは、早くから己れの死の恐怖を見すえ、「死とは何か」とその正体をとらえようとした。アルタモントの町の人々の死をみつめながら、ユウジーンは人間存在を執拗に問う。「いまはどこに？ そのあとはどこに？ さらにそのさきはどこへ？」²⁵⁾——返ってくる答は、いつも「虚無」でしかなかった。

1924年に書かれた母宛の手紙の中で、ウルフは次のように死と対決する姿勢を明らかにした。「勇敢で正直な人が恐れなくてはならないことがたった一つあります。それは死です。死は少しもこわくない、と言う人は臆つきで、愚かで、偽善者です。死は人間の一切の栄光に終止符を打つからです。」²⁶⁾

本の頁から、恐怖の叫びが、抵抗の雄叫びが、絶望のうめきが聞こえてくる。

前と後の永遠の無にはさまれて、我々は一回だけの、つかのまの命しか持ちあわせていない。けれども、ウルフのこの死生観は、生のむなしさとか、死への衝動とは結びつかなかった。

『天使よ故郷を見よ』のユウジーンはベンの死を通して、「人が生から逃れるのは、生が退屈だからではない。人がはかないから生が人から逃れるのだ」ということを知った。「今まで生を思いっきり充実させて、生の偉大なる瞬間を味わったことがなかった」と悔やみ、「(一切の生の経験を) 丸めて球にして肉の中に埋め込んでしまい、他の誰よりも完全なかたちで自分のものにした²⁷⁾」と願うのであった。

ユウジーンは、まるで死期を悟った者のように、過ぎゆく時間をいとおしみながら、残された命を燃やそうとする。このような生き方は、生をもてあまし、生の倦怠に悩み、いかにして死のうかと思っている人からみれば、いかにも仰々しく、未練たらしく、アホらしく感じられるかもしれない。結局は、ウルフの処女作は、いかに生きようかと考えている人々のために、死を語ることによって、生の真の姿をもはっきりと見えるようにしたのである。

昔、石を彫る父の仕事を羨み、今、故郷アルタモントを去ろうとしている主人公の青年は、やがて、死にうち勝つ誰一の方法であることを確信して、作家²⁸⁾の道を選ぶことになる。

〔注〕

- 1) J. Russel Reaver & Robert I Strozier, "Thomas Wolfe and Death" (*Thomas Wolfe: Three Decades of Criticism*, ed. Leslie A. Field, N. Y.: New York University Press, 1968) pp. 40-42.
- 2) "Of Time and Neurosis" (*Thomas Wolfe: A Collection of Critical Essays*, ed. Louis D. Rubin, Jr., N. J.: Prentice Hall, Inc., 1973) p. 42.
- 3) *Look Homeward, Angel* (N. Y.: Charles Scribner's Sons, 1929) p. 47.
- 4) *Thomas Wolfe: Ulysses and Narcissus* (Ohio: Ohio University Press, 1971), p. 46.
- 5) Cf. *Look Homeward, Angel*, pp. 30-36, 66, et passim.
- 6) *Thomas Wolfe's Letters to his Mother Julia Elizabeth Wolfe*, ed. John Skally Terry (N. Y.: Charles Scribners Sons, 1943), pp. 51f.
- 7) *Look Homeward, Angel*, p. 49.
- 8) *Ibid.*, p. 83.

- 9) Ibid., p. 276.
- 10) Ibid., pp. 113-115.
- 11) Ibid., p. 464.
- 12) Ibid., p. 465.
- 13) 「随想録 第一巻」(『モンテニユ全集』I. 関根秀雄訳, 白水社, 1957), p. 62.
- 14) *The Story of a Novel* (N. Y.: Charles Scribner's Sons, 1936), pp. 51f.
- 15) *Look Homeward, Angel*, p. 426.
- 16) Ibid., p. 244.
- 17) Ibid., p. 158.
- 18) Ibid., p. 375.
- 19) Ibid., p. 352.
- 20) Ibid., p. 229.
- 21) Ibid., p. 467.
- 22) Cf. Reaver & Strozier, op. cit., p. 40.
- 23) *Look Homeward Angel*, p. 476.
- 24) (London: Jonathan Cape, 1932), p. 10.
- 25) *Look Homeward, Angel*, p. 223.
- 26) Terry (ed.), op. cit., p. 79.
- 27) *Look Homeward, Angel*, pp. 491f.
- 28) *Of Time and the River* (N. Y.: Charles Scribner's Sons, 1935), pp. 550f.

